

「臨床面接技法 患者との出会いの技」

The Clinical Encounter, 2nd ed.: A Guide to the Medical Interview and Case Presentation

J. Andrew Billings・John D. Stoeckle

日野原重明・福井 次矢

大西 基喜

著

監訳

訳者代表

東京慈恵会医科大学名誉教授

阿 部 正 和

臨床医学の入門は診断学であり、診断学の入口は患者への面接である。ことほどさように、面接は医師が医師としての業を適切有効に発揮するために重要なことである。高度な医療技術が展開されている現在ではあっても、面接というテーマは、医師が存在理由を明らかにするためにも、いかに重要であるかは、本書を読めばよく理解できるであろう。

学生時代、および戦後の慌ただしい時代に私が学んだ内科診断学の教科書では、面接とは言わずに問診という項目が巻頭に設けられていた。そして、その項目に割かれている頁数は、ごくわずかなものであった。近年になって、ようやく面接の重要性が叫ばれるようになり、面接を主題とする参考書も数多く刊行されるに至った。その中で、私が最近のヒットと思ったものに、2000年8月刊行の「はじめての医療面接—コミュニケーション技法とその学び方」(斎藤清二著、医学書院)がある。この書は、あくまで“患者の観点”に立って、どういう会話のやりとりが適切か、どういう態度が医師と患者の関係を良好に保つのに必要か、という点に力点がおかれているすばらしい本である。

ここに紹介する「臨床面接技法—患者との出会いの技(The Clinical Encounter—A Guide to the Medical Interview and Case Presentation)」は、前述の書よりも更に上をいく好著と断言してはばからない。本書を一貫して流れている精神は、

「医療は医師と患者との共同作業である」という私の日頃の主張と全くよく合致するものである。私は心嬉しく思ったのである。

本書は、Stoeckle および Billings 両先生の共著で、Harvard 大学医学部において、かなり以前から実施している自己学習方法(New Pathway)に則ってつくられたカリキュラムの内容が主なものである。内科医のみならず、各科の臨床家、更に医学以外の分野の専門家の意見まで幅広く取り入れられている点も大きな特色である。患者との出会いから始まって、患者の意思も十分に反映された上で行われる診療のあるべき姿を、豊富な会話例を含めて説明した実践的な書と言える。

本書は2部構成になっている。その第1部は入門編であり、全巻241頁のうち、その1/3の頁数を占めている。とりあえずは、この第1部だけでも読むことをおすすめしたい。第2部は応用編であり、ここでは面接技法をいろいろな場面でどのように発揮したらよいかを、極めて具体的に、実際の症例を提示しながら解説している。学生のみならず一般医家の方々にも大いに役立つ内容となっている。

また、各章の冒頭に掲げられている名医および有識者の方々の箴言も私たちの心に強く響くものである。頭の中にとどめておくべき至宝といっていよう。

平凡で、陳腐のように思われるかもしれないが、言葉こそが医療の始

まりであり、また医療の終わりでもある。言葉と行動の如何が、診療そのものの成否を左右すると言っても過言ではない。このことは本書を読めば、まことによく理解できるのである。

いずれにせよ、本書では、医師の言葉や行動こそが、臨床実践の中でいかに重要であるかが力説されており、まさに臨床面接のアートの真髓が述べられていると言えよう。

私自身は、医学教科書の翻訳ものにはあまり好きではない。それは、読んでも文章の意味がよくわからないで隔靴搔痒の感をおぼえることをしばしば経験するからである。しかし本書は、その内容の一行一行が頭の中にそのままスーッと入ってくるのである。尊敬する日野原重明先生と、臨床医として現在最も光り輝いている福井次矢先生のお二方の監訳のなせる業だからであろうか。心から敬服する次第である。

本書は、臨床面接入門のテキストとは言え、極めて洗練された文章に満ち満ちているばかりではなく、行間に患者への愛情が込められていることに、私は深い感銘をおぼえた。学生のみならず、ベテランの医師の方々にも、格好の参考書として役立つ、近年まれにみる好著と言えよう。

● B5 頁268 図7 表5 2001
定価(本体3,400円+税) 送料実費

—医学書院 刊(☎03-3817-5657)